

# 九州の中核都市めざして



写真は熊本市の展望

等を促進し「水と森の都」のイメージを活かした都市環境の整備をはかる。また博物館、会議センター、総合運動公園等の文化、体育施設、上、下水道、清掃施設の整備を進めるとともに住宅については、近年における郊外への伸展傾向にかんがみ、地区周辺を含めた総合一体的な住宅用地の配置整備と住宅の確保をはかる。

さらに、道路交通の円滑化、都市美の増進をはかるため、熊本駅前、都心部商業地区等における都市再開発事業を促進するとともに駐車場の建設整備を進める。特に今日重大な社会問題となっている公害、交通安全対策については魅力ある都市づくりの一環として公害の予防、交通安全施設の整備に重点をおきその促進をはかる。なお、中核都市地域における災害を防止し都市施設、産業基盤施設の保全をはかるため、白川、緑川、坪井川、加勢川等の河川改修ならびに熊本平野の総合開発事業の促進も、本地区開発上の重要課題である。

## ★主導的産業の振興

本地区を中心とする都市圏内はもとより、広く県全体について経済開発の主導的役割を果す産業の振興をはかることがきわめて重要である。

このため、特に本地区内については、市街地や工業開発地区、観光レクリエーション地区以外の地域は、農林水産業の

振興をはかることとし、飽田、天明および熊本の平坦水田地帯では、米のほか、キヌウリ、トマト、ナス等のハウス、トンネル栽培、をはじめ託麻、北部の畑作台地では白菜、西瓜、大根等の都市近郊野菜、金峯山を中心とする山地は蜜柑、有明海はのりの主産地としてその振興をはかる。このほか、託麻、北部の酪農、肥育、熊本、飽田、天明地区における養豚、養鶏等の畜産振興につとめる。

工業については、既存工業の育成をはかるとともに、熊本周辺の内陸部に食品、木材加工、繊維、機械金属その他都市型工業、地場資源、労働力を活用する工業等の開発を促進し、近代的な工業地帯の形成をはかる。

商業については、主として熊本市について今後の消費の大量化、消費内容の多様化と商圏の拡大に対応して経営の大規模化、共同化と専門店化を促進し、近代的な商店街の形成、卸売団地の開発をはかるものとする。

さらに観光については、熊本城一帯をセントラルパークとして水前寺、江津湖、緑川河畔ならびに立田山、河内温泉を含む金峯山県立公園を結び、水と森と文化財を活かした観光圏の開発振興をはかる。

特に熊本地区は九州8字型周遊観光ルート結節点として、九州広域観光圏における観光中核都市としての管理機能を高めるような機能施設の整備を促進する。

## のり養殖

### ★有明海南部漁場の問題点

この区域ののり漁場は、有明海の中央部に位し、しかも湾曲部に当り、いわゆる凹型漁場となっているので有明海の主環流とは別の水塊が存在すると共に、坪井川、白川、緑川が流入し、かなり豊富な陸水との混合水塊となるため、本県にとっては最も内湾性の強い漁場となりの養殖上これが大きなプラス面ともなり時にはマイナスの面ともなっている。

漁場面積は約二、二〇〇畝。

この熊飽、宇土地区は火山灰や浮泥が多いため、ひびがよこされるので、永年、割竹を編んだ浮ひびが養殖ひびとして用いられてきた。昭和四十年代においても養殖施設としては割竹浮ひびが約六万一、三〇〇枚、網ひび約八万三、六〇〇枚で三十九年度の割竹浮ひび六万六、八五〇枚、網ひび三万四、九七五枚と比べると網ひびの増加は極めて著しいが、これはのり摘機の登場に負うところが大きい。

ところでこのような本県唯一の優良漁場ののりの生産量は極めて不安定で四十年年度の乾のりの生産枚数は約三、八〇〇万枚、三十九年は一億九、〇〇〇万枚、三十八年七、二〇〇万枚、三十七年一億六、九〇〇万枚というように、一年毎に変動が激しく、この地区では偶数年が不

作となっている。その主たる不作の要因は、この有明海南部海域が凹型漁場で有明海の主環流との交流が少なく、いわば孤立水塊であるがために、のりの生理に不適な条件をこの水塊が持ったとき、その回復が遅く、のりに与える影響度が大きいのではないかとと思われる。

不適な条件のうち自然現象で最も大きな要素は降水量であると考えられる。

このように漁期中の降雨が阻害因子に変わった大きな原因が二つある。

一つは降雨によって海水が低かんとなり、赤クサレ菌の繁殖を促進することになるため急激且つ甚大な赤クサレ病の被害を受ける。もう一つは、昭和三十四年以降導入されたスサビノリが低かんに弱いため、海水の流動拡散が小さい小潮時に降雨があり、しかも風つづきで河口に近い漁場では本県のように、ひびを吊下げて養殖する浮動式養殖法だとおさら水イタミを起すわけである。

熊飽宇土地区ではとりわけ河川水の影響が強いので、養殖主体はアサクサノリとし、沖合漁場の開発にスサビノリを採用するよう、のり系状態培養の果胞子付の段階から考慮されることが大切だと思われる。